

C-6 分断・破壊事象を表す動詞「切る」のカテゴリー構造とその習得 —力動性のモデル・心理実験・コーパスデータに基づく検討—

王 鈺 (大阪大学大学院)

要旨 本研究では、現代日本語における多義動詞「切る」の意味カテゴリー化はどのようになるのか、さらに、そのカテゴリー化の習得に関して、中国人学習者が持つカテゴリー構造は母語話者のものとは異なるのかを明らかにした。力動性に基づく意味分析を行い、主動体による内在傾向性の体現に着目する分類を試みた結果、4つの意味パターンに新たに分類するとともに、「集中した力による状態変化(静止状態から活動状態へ)」というスーパー・スキーマを抽出した。また、コーパス調査を通して、各パターンの頻度的階層性、主要な共起名詞と意味特徴を考察した。一方、心理実験に基づくクラスター分析では、意味分類と意味記述の心理的実在性がある程度検証できたとともに、母語話者と学習者の持つ「切る」のカテゴリー構造が異なることが明らかになった。具体的には、学習者は(i)動詞と目的語項の関係(ii)本動詞と複合動詞の関連性(iii)抽象的語義群の捉え方が不明瞭であること、および(iv)共起語の表面の性質に着目した意味分類を行う傾向が見られた。

1. はじめに

現代日本語における数多くの多義動詞では、分断・破壊事象を表す「切る」は様態卓立性が高い cut 系動詞であり、日本語教育の早い段階で扱われるが、学習者にとって主に2つの習得上の困難がある。

1つ目は、「切る」の複数の語義とそのつながりに関することである。(1a)は鋭利なナイフで対象をいくつかの部分に分けるという典型的な分断動作を表す。それに対し、(1b)は整理されたトランプを一続きになっているものとして捉え、手で対象を混合するという意味を表す。(1c)は勢いとスピード感を伴い、押し分けて横断するという意味を表す。(1d)は測定値が基準値を突破する意味を表し、動作主と道具格が捉えにくく、意味がより抽象的になる。これらの語義は広義レベルですべて分断・破壊事象と言えるが、母語話者は無意識にカテゴリー構造として捉えられるのに対し、学習者には上述の各語義とそのつながりを自然に理解することは至難の業である。

(1) a. リンゴを切る。 b. トランプを切る。 c. 波を切る。 d. 10秒を切る。

2つ目は、「切る」との共起制限である。現実世界においては、固体以外のものを切るのは物理的に可能ではないと考えられる。固体である場合は「切る」と共起でき、液体と気体である場合は「切る」と共起できないと判断する傾向が見られる。しかし、(2)の「泥」と「砂糖」のように、固体であっても「切る」と共起しにくい例が存在し、(3)の「水気」や「雲」のように、液体と気体であっても「切る」と共起できる例も少なくない。それゆえ、共起語の物理的性質のみで容認度を判断するのは適切ではないと考えられる。

(2) a. *泥を切る。 b. *砂糖を切る。 (3) a. 野菜の水気を切る。 b. 飛行機は雲を切る。

そこで、本研究では、分断・破壊を表す多義動詞「切る」を考察対象とし、認知意味論の観点からその意味・機能を分析し、母語話者と学習者の持つ「切る」のカテゴリー構造がそれぞれどのようになるのかを検討していく。

2. 理論的枠組み

先行研究では、「切る」に関するカテゴリー構造についての考察(森山 2012, 2015, 栗田 2017, 洪 2020)はあるものの、「切る」の事象の動作主、被動作主、および力の作用方式に関する制約は明確化されておらず、意味スキーマは曖昧であり、意味分類と意味記述をさらに検討する余地が残される。また、そのカテゴリー構造の習得に関して、学習者が持つ構造はそれとどう異なるのかを検証した研究は管見の限り存在していない。

本研究では、「切る」のスキーマを検討するため、力動性(Talmy 1985, 2000)のモデルを採用した。力動性とは、力という観点から見た個体の相互作用のことである(松本 2003: 60-65)。力の構造においては、二つの対立した力実態のバランス(強・弱)によって相互作用の結果状態が異なる。本来的に活動か静止の傾向をもつ存在は主動体(agonist)と呼ばれ、主動体に対抗する力を加える存在は対抗体(antagonist)と呼ばれる。図1で力動性の図式を示す。図式 a, b は力動性の基本的な通常状態のパターンとして挙げられる。例えば、(4a)の目的語項「空気」、すなわち主動体は静止の傾向を持つが、主語項の「扇風機」、すなわち対抗体から継続的により強い力を加えられ、力が行使された期間中に本来の内在傾向性と逆の傾向が生じた。このような事象は、使役と使役の結果が同時に生じ、拡張使役(extent causation)と呼ばれる。一方、(4b)は図式 c, d のように、対抗体である「ピストン」から主動体である「油」に力を加える状態になることを通し、力が行使された期間中に主動体の状態変化が見られる。このような使役における変化のプロセスが見られる事象は開始時使役(onset causation)と呼ばれ、対象の状態変化を含む「切る」に関する分断・破壊事象に合致する。

本研究で上述の力動性のモデルを採用する理由としては以下の2点を挙げる。1点目は、「<主体>が<対象>を<動詞(切る)>」の構造上、動作主(攻撃を与える主体)と被動作主(攻撃を受けるまたは抵抗を与える)という二つの力実態が存在し、既存の状態とその状態に関する破壊、または行為に関する妨害とその行為という力の対抗関係があるため、それぞれ対抗体と主動体として捉えられる。2点目は、力の強さ、力による状態変化などの力的要素は分断・破壊事象に適用可能であるため、力的認知による分析のさらなる可能性を支持できる。

(4) a. The fan kept the air moving. b. The piston made the oil flow from the tank.

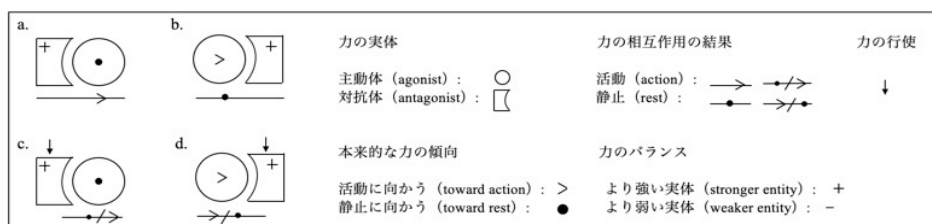


図1 力動性のモデルの図式

3. リサーチデザイン

3.1 研究目的と研究設問

前述のように、本研究では、「切る」のスキーマを検討し、意味・機能を分析することと、母語話者と学習者の持つカテゴリー構造の違いを明らかにすることを目的とする。これらを踏まえ、以下の3つの研究設問を立てた。

RQ1 「切る」のカテゴリー構造はどのようになっているのか。

RQ2 意味分類と意味記述の結果は心理実験によって検証されるのか。

RQ3 学習者によるカテゴリー化の結果は母語話者による結果とどう異なるのか。

3.2 手法と分析手順

手順は以下の(i)から(iii)である。(i)「切る」の各語義に関する意味分類を行い、語義間の有契性と共通したスーパー・スキーマを探った。(ii)コーパス調査を通し、各意味パターンの頻度的階層性、主要な共起名詞と意味特徴を明確にした(RQ1)。(iii)意味分析の心理的実在性を検証するため、意味分類と意味記述の両側面から、母語話者と中国人学習者各30人を対象とした心理実験を行った。実験1(類似性判断テスト)は「切る」の用例(16*2文)が書いてあるカードを提示し、意味が似ているものをグループに分けるように求めた。実験2(意味素性評定テスト)はコーパス調査でまとめた意味特徴を指標として抽出し、各例文について5段階の確信度評定を行うように求めた。得られた結果に基づいたクラスター分析により、それが意味分析の結果と一致するかを考察した(RQ2)。また、母語話者と学習者のカテゴリー構造では違いがどのようになるかを検討した(RQ3)。

4. 結果と考察

4.1 力動性に基づく意味分類

各辞書と先行研究で言及された「切る」の各意味用法を幅広く取り込み、その用法を力動性に基づいて以下の4通りのパターンに分類した。

【パターン 1 外在連続性】:力によって外在連続性を破壊し活動させる。

- 典型的な分断動作(中心義:<鋭利な道具で><集中した力で><一続きものを><分断する>)
 - (5) 熱湯に包丁をつけ、かるく水気を取ってから、一気に[ケーキ]を切る。(BCCWJ 出典, 以下は同様である)
 - (6) *[泥]を切る。 / *[砂糖]を切る。(作例)
- 分断動作+α(中心義からのメトニミー拡張群)
 - (7) ホテルの部屋に帰って、車のなかで渡された[封筒の封]を切ると、なかから東独のパスポートが出てきた。
 - (8) H2 ブロッカーの潰瘍治癒率は、八十%と効率で、潰瘍で[胃]を切る人が激減したことが確かです。
 - (9) 依頼主に[領収書]を切る時は、印刷代+デザイン料・雑費を含めた金額を書いたらいいのでしょうか。
 - (10) 高橋与惣右衛門は敵兩人と切結び、猪太夫の眼前に於いて[敵一人]を切る。
 - (11) そこで床を高くして床面に[炉]を切ること、つまり高床式住居にすることを考案した。

「切る」の対象は外在的に一続きになっている性質を持ち、安定した状態にあり、ある機能を果たすに足る「全体」としてのまとまり、統合性(integrality)を持っているため、その統合性は主動体の静的内在傾向性に当てはまる。典型的な分断動作(「ケーキ」など)とそれからのメトニミー拡張群(「封筒の封」、「胃」、「領収書」など)はこのパターンの成員となる。ただし、(6)「泥」と「砂糖」に同様に分断動作を行なっても分離された対象はまだつながっている全体として認識でき、前の量と比べ少なくなるだけであるため、状態変化とは言えない。切れ目と裁断面も判断しにくく、「切る」との共起は容認できないと考えられる。



図 2 外在連続性の力構造パターン

【パターン 2 内在秩序性】:力によって内在秩序性を破壊し活動させる。

- (12) [トランプ]を切ってテーブルに伏せて置き、上から一枚とって、表を見せた。
- (13) 豆腐は電子レンジで三十秒加熱して[水気]を切った。
- (14) 流麗な文章で、痛烈に当時の[世相]をきっていた。
- (15) 就寝時や外出時には[電気]を切る。

「切る」の対象には、外在的に見えない体系性や秩序性が存在する。(12)「トランプ」は本質的に紙であるが、「紙を切る」のような意味パターン 1 と異なり、物理的分断動作を伴わず、外在連続性の変化は含意しない。トランプの用途と機能を考えると、実際にトランプは普通の紙

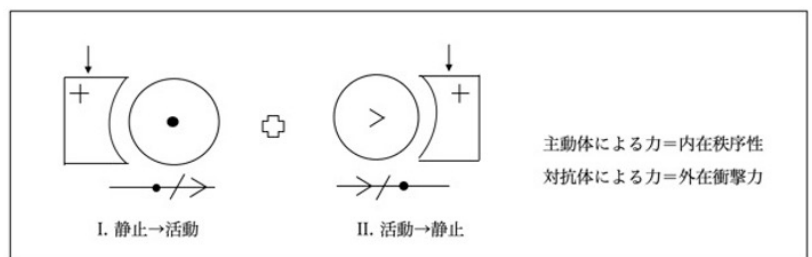


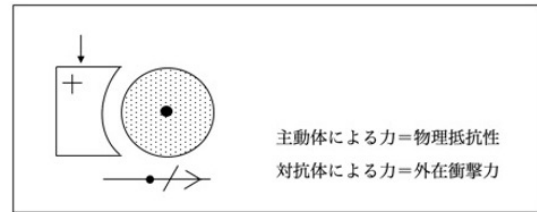
図 3 内在秩序性の力構造パターン

ではなく、人間が意図的に数値やマークなどをつけ、体系を設けるカードであるため、一種の内在秩序性が存在する。その内在秩序性は主動体の内在傾向性であり、対象は本来的に静止傾向にある。対抗体からの力で安定した秩序性を壊すことを通し、対象では混沌とした活動状態への状態変化が想定できる。「水気」「世相」「電気」などの一定の体系や組織で構成される対象はこのパターンの成員となる。ただし、「電気」や「関係」などの中断義を表す対象は、内部組織が互に行き交う形で特定の機能を実現し、本来的に静止状態ではなく、

流動する傾向にあると捉えられるため、典型的なく静止→活動>の状態変化と違い、周辺的な位置を占める。

【パターン3 物理抵抗性】:力によって物理抵抗性を克服し活動させる。

- 濃い密度で形成された抵抗力
- (16) ?[水]を切る。 / ?[空気]を切る。(作例)
- (17) 南からの黒潮に乗ってスナメリたちが[波]を切る。
- (18) と同時に稲妻が鋭く[雲]を切ってはした。
- (19) シュンつと[空]を切る音を立てて小石は飛び、
見事、物の怪の後頭部に命中した。



- 物理的慣性で形成された抵抗力 図4 物理抵抗性の力構造パターン(円内の点は濃い密度を表す)
- (20) バスが急[ハンドル]を切るたびに、私の体は激しく左右に引張られた。

「切る」の対象には動作への抵抗力が存在する。一般的に、(17)、(18)の「波」、「雲」との共起を表す横断義はメタファーによる展開で説明されるが、メタファーのみで説明すると、(16)の容認度の低下は解釈しにくくなってしまう。それゆえ、対象が液体と気体である場合は、性質に関する何らかの制約があると想定できる。液体や気体は固体とは異なり、自由に流動できるため、密度がある程度濃い場合、対象自体には物理的な抵抗力が見られる。すなわち、「波」や「雲」などには濃い密度があるため、外からの力に対し、ある物理抵抗性が存在している。より集中的な強い力を対象に加えると、主動体である「波」や「雲」が静止状態から活動状態に変わる。(16)の「水」や「空気」などの濃い密度のイメージが喚起しにくいものは「切る」との共起が容認しにくい。ただし、(19)のような勢いやスピード感で力の強さと衝撃を際立たせる場合は対象がある程度の抵抗力を持つことを裏付けるため、容認度が自然に上がると考えられる。一方、(20)のような進行方向を変えたり、回転を与えたりする回転義は運動中の物理的慣性で形成された抵抗力が捉えられるため、同様にこのパターンの成員となる。

【パターン4 心理傾向性】:力によって心理傾向性を突破・違反し活動させる。

- 事柄の達成を期待するが、目標達成に困難を伴うまたは長い時間がかかると認識するもの
- (21) 100メートル走で[10秒]を切った。(作例)
- (22) ようやく、と言ったが、パイフウの抜き撃ちは平均で[コンマ一秒]を切る。
- 事柄の達成を期待していないもの
- (23) 試験まで残り[一ヶ月]を切った。(作例)

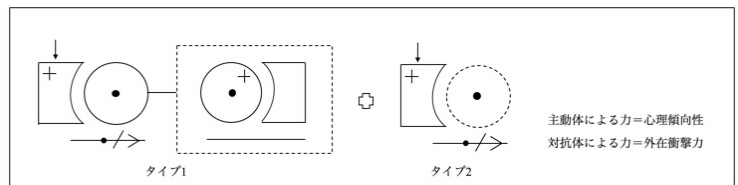


図5 心理傾向性の力構造パターン

人間が心理的に、行為の達成に対して強い抵抗力を持つと認識・予想する事柄が「切る」の対象となる。このパターンには、二つの下位分類が存在している。タイプ1は事柄の達成を人間が期待しているが、これを達成するのはあまり簡単ではなく、何らかの困難を伴うまたは長い時間がかかると認識する心理的傾向性が存在するものである。「切る」の対象が数値である場合、基準値より下回るという意味を表しているが、数値を下回るという意味のみを表すわけではない。例えば、(21)には、「100メートル走で9秒99」の成果を達成する前に、「10秒」という壁を人間が意識している。したがって、「10秒を切った」は「10秒を下回った」と比べ、行為を実現したとき、目的達成というプラスのニュアンスを伴う。(22)の「ようやく」などの副詞と共起する用例も多い。それに対し、タイプ2はその事柄の達成を人間が期待していないものである。(23)が表す事象には、動詞句に表された事柄が起きてほしいが、起きにくいと思うというような心的葛藤が存在せず、心理的な側面は単純であるため、タイプ2のほうに合致している。その心理傾向性は「期限が切れる」という事象に対する抵抗性と理解できるので、事象達成と事象達成への心理的妨害という対立関係が捉えられる。上述のような心理的妨害は複合動詞の意味にも見られるため、本動詞と統語的複合動詞(「[走り]切る」、「[疲れ]切る」など)の語義間の有契性も窺わせる。

【スーパー・スキーマ】

上述の意味分類における背景化されたものを考えると、パターン1とパターン2には対象の安定した状態(主動体)とその状態への破壊(対抗体)が、パターン3とパターン4には行為への妨害(主動体)とその行為(対抗体)という対立関係が捉えられる。いずれの意味パターンからも、力によって対象に含まれた内在傾向性を何らかの形で変更することを通し、対象の状態を変えるという共通の事象が抽出できる。それゆえ、力動性の構造を踏まえて言えば、「切る」のスーパー・スキーマを「力による状態変化(静止状態から活動状態へ)」とする。

4.2 コーパス調査

分類の各意味パターンの意味特徴を明確にするため、NINJAL-LWP for BCCWJ コーパスを用いて「名詞+を+切る」というコロケーションに該当する頻度5以上の項目を抽出し、共起名詞のタイプを考察した。その中で、「もの」、「こと」など実質的意味が希薄な語と、「しらを切る」「仁義を切る」などの真正の慣用句を除き、性質の類似したものを上位概念にまとめ、各頻度を集計した。結果は表1に示される。

意味パターン	語義	共起名詞タイプ	意味特徴
外在連続性 (1744/43.03%)	0. 分断義	植物:46%(木, 枝, 竹, 樹木) > 材料類:23%(糸, 紙, 材料, 線) > 料理場面:20%(肉, 野菜, 玉ねぎ, 豆腐) > その他(根元, 先, 頭, 角):11%	nonintegral ・物理的力 ・鋭利な道具の介在と裁断面・切れ目の位置の顕在化に焦点を当てる
	1. 開封義	容器の口(封, 皮, お腹, シャッター)	
	2. 切除義	髪類:97%(髪, 毛, 爪) > 患部:3%(胃)	
	3. 切取義	切符・書類(領収書, 切符, 小切手, 伝票)	
	4. 殺傷義	敵・意図的:74%(人, 敵, 侍, 人形) > 身体部位・無意図:26%(手, 指, アキレス腱, 額)	
内在秩序性 (1753/43.25%)	5. 創造義	形・デザイン:68%(十字) > 穴類:22%(ネジ, 溝)	nonfunctional ・物理的・社会力学的力 ・機能中断・喪失(分断された対象は元の状態に還元できる)に焦点を当てる
	6. 混合義	カード類(カード, 牌)	
	7. 取捨義	液体:97%(水気, 油, お湯, 汁気) > 組織:3%(組織)	
物理抵抗性 (329/8.12%)	8. 中断義	電気・電気器具:71%(電話, 電源, 接続, 電気) > 言語活動:14% > 人間関係:13% > 時間類:2%(期限)	・物理的力 ・(主体からの攻撃に対し)対象による物理的抵抗が強く感じられる点(物理的力の対抗)に焦点を当てる
	9. 批判義	首	
心理傾向性 (227/5.60%)	10. 横断義	自然界の液体・気体(風, 空, 音, 波)	・認識的力 ・(主体からの攻撃に対し)対象による心理的抵抗が強く感じられる点(心理的力の対抗)に焦点を当てる
	11. 回転義	回転装置:85%(ハンドル, 舵, クラッチ, ステアリング) > 回転路線:15%(カーブ, 旋回)	
心理傾向性 (227/5.60%)	12. 突破義	数値・基準値(X円, X分, X度, Xメートル, Xグラム, X割, Xパーセント)	・認識的力 ・(主体からの攻撃に対し)対象による心理的抵抗が強く感じられる点(心理的力の対抗)に焦点を当てる
	13. 完遂義		
	14. 極度義		

表1 各パターンの主要な共起名詞のタイプ・構成比・意味特徴 (NLBに基づく)

4.3 心理実験による検証

4.3.1 意味分類の妥当性(類似性判断テストによる)

クラスター分析の結果は図6と図7の通りである。母語話者の結果では、最長の定常状態の箇所にカッティングポイントを置くと、大きく2群に分かれた。群内のコロケーションを考察すると、左側の群は袋, 紙, 領収書, 胃, 爪などの目的語項を含み、プロトタイプの概念である分断動作に近い語義のクラスターである。すなわち、中心義と中心義からのメニミー拡張群である。右側の群は麻雀, 雲, 世相, 縁などの目的語項を含み、中心義からより離れた拡張義のクラスターである。

さらに、2群の内部構造を分析すると、左側の群では、2つの下位のクラスター(図6のIとIIを参照)が形成された。クラスターIは<分断義>, <開封義>, <切除義>, <切取義>, <殺傷義>のコロケーションを

含み、〈創造義〉を除いた意味分析のパターン1の外在連続性に対応する。〈創造義〉のコロケーションは独立したクラスターII になった。これは「囲炉裏」、「型紙」が本来的にあるもの全体の部分である点に着目し、パターン1に分類するという意味分析の結果とずれていた。動詞と目的語項の関係から考えると、(5)の「ケーキ」が分断動作の対象であるのと異なり、「型紙」、「囲炉裏」は動作の対象ではなく、直接的な対象の「紙」、「床」を分断して得られた結果である。すなわち、〈創造義〉の場合では動作の結果が焦点化され、動作の対象が言語化されない。このため、生産的用法としての〈創造義〉を他の語義と区別し、別途に記述する必要がある。そして、右側の群では、3つのクラスター(図6のIII, IV, Vを参照)が形成され、それぞれ意味分析におけるパターン2の内在秩序性、パターン3の物理抵抗性、パターン4の心理傾向性と一致している。このため、母語話者のクラスター分析の結果は力動性理論に基づいた意味分類の心理的実在性のある程度検証できると言える。

学習者の結果では、母語話者と同様に中心義に近いクラスターと中心義に相対的に離れた拡張義を含むクラスターの2群に分かれた。この点で上位カテゴリーの区分では母語話者と大体一致している。しかし、さらに2群の内部構造を分析すると、下位カテゴリーに関して、母語話者のカテゴリー化との差が見られた。母語話者は目的語項の特徴によるまとまったカテゴリー構造を持っているのに対し、学習者は下位の周辺的な用法ほどカテゴリーが構造化されない傾向が見られた。

まず、左側の群では、〈創造義〉は独立したクラスターにならない点で母語話者の結果と一致していない。中国語の分断動詞においては、動作結果に焦点を当てた意味用法が基本的に存在しないため、中国人学習者はこの語義を十分に認識していないと考えられる。右側の群では、母語話者においては意味分析のパターンと一致していた3つのクラスターは、学習者の場合では同様なパターンは見られず、大きく2つの下位のクラスター(図7のクラスターII とIIIを参照)が形成された。母語話者のカテゴリー化では、語彙的複合動詞と統合的複合動詞はそれぞれ図6のクラスターIIIとクラスターVに分類されたのに対し、学習者においては同一のクラスターになった。このため、学習者の方は本動詞と複合動詞の意味拡張を捉えにくく、それぞれを分けて認識する傾向が見られた。クラスターIIIは部門、期限、縁、電気、政治、世相、カーブなどの抽象的なものを含むが、球、波、トランプ、麻雀、雲などの具象的なものも見られた。また、「切る」のような分断動作と類似する動作を行う語義とそうでない語義両方とも含んでいる。全般的な意味分類が混乱し、カテゴリー化していない傾向が示された。

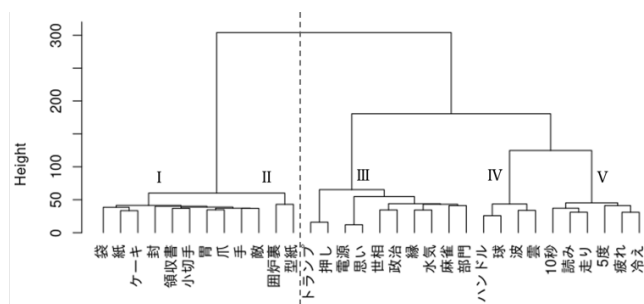


図6 母語話者による類似性判断の結果

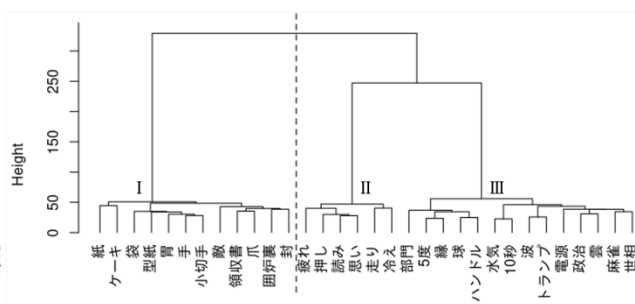


図7 学習者による類似性判断の結果

4.3.2 意味記述の妥当性(意味素性評定テストによる)

前節では、意味分類の妥当性はある程度検証できたが、母語話者による分類の基準はまだ明確でないため、その分類結果が偶然のものである可能性は残る。このため、この節では、意味分析と実験1の類似性判断テストの結果が、本研究の力的認知に基づく意味記述によって再現できるかどうかを検証していきたい。前述のコーパス調査によってまとめた各パターンの意味特徴を以下の5つの指標として抽出し、被験者に提示した。各意味素性評定項目について5段階の確信度評定を行うように求めた。

指標	側面	具体的意味素性設定
指標 1	力の種類	対象に行使した力は物理的力を含む。
指標 2	力を行使する道具	鋭利な道具またはそれに相当するもの(スピード感など)の介在がある。
指標 3	力の対抗の強さ	主体からの攻撃力に対し、対象による抵抗感が感じられる。
指標 4	力による状態変化	分断された対象は元の状態に還元できる。
指標 5	力による状態変化	変化点(あるいは切れ目・裁断面など)は予測・判断できる。

表 2 意味素性評定指標

母語話者と学習者による結果は図 8 と図 9 の通りである。母語話者の結果は全体的に 4 つのクラスターにカテゴリー化されていた点で一致しており、意味記述の心理的実在性がある程度認められた。まず、右側の群は「切る」に関する分断・破壊事象において、力の対抗は強く感じられる動き(波、雲、敵、球、カーブ、世相などの動いているモノ)であるのに対し、左側の群は力の対抗はそれほど強く感じられていないモノ(紙、伝票、袋、胃、トランプなどの動いていないモノ)であると考えられる。また、それぞれの下位分類では、抽象物(図 8 のクラスター I と III を参照)と具象物(図 8 の II と IV を参照)の区分がある程度観察された。しかし、殺傷義である「敵」、批判義である「政治」「世相」の分類は意味分析とずれていた。

一方、学習者の結果では、点線の左側と右側の違いに着目すると、母語話者にそれほど強く感じられない抽象性と具象性を一番際立った基準にする傾向が見られた。右群は物理的分断事象(「紙」「爪」など)に加え、一続きものを分断するように物理的力を行使する事象(「波」「カーブ」など)を含む。それに対し、左群は「政治」「縁」、数値、動作(複合動詞の前項)などのように、すべて抽象性が高いものである。そのため、学習者はより共起語の表面の性質(抽象的か、具象的か)に着目し、意味分類する傾向が観察された。

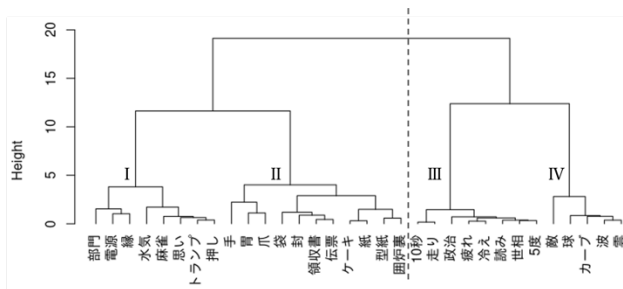


図 8 母語話者による意味素性評定の結果

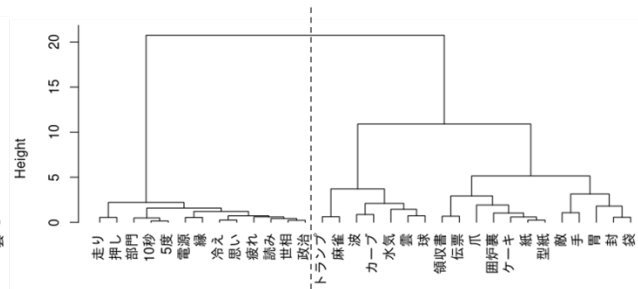


図 9 学習者による意味素性評定の結果

5. まとめ

本研究では、「切る」の意味カテゴリー化に関して、力動性のモデルに基づく質的分析により、各意味パターンと共通したスーパー・スキーマを抽出したとともに、コーパス調査および心理実験による検証を行った。さらに、日本語母語話者と中国人日本語学習者のカテゴリー化の違いも客観的に検討した。本研究によって、分断・破壊事象を表す動詞は意味論的に力学的な認知に基づいた分析が可能であることとその心理的実在性が認められる。なお、語彙のカテゴリーはその語の内部構造だけではなく、類義語との境界線も強く関わっている。今後、「切る」と同様に分断・破壊事象に属する類義語「割る」「裂く」などとの関連性を検討していきたい。

主要な参考文献

- Talmy, Leonard. (1985). Force dynamics in language and thought. *In papers from the twenty-First Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*. Chicago: Chicago Linguistic Society. / Talmy, Leonard. (2000). *Toward a cognitive semantics Volume2: Typology and process in concept structuring*. Cambridge, MA: MIT Press. / 栗田奈美(2018)『視覚スキーマを用いた意味拡張動機づけの分析』春風社. / 洪春子(2020)「日中韓の「切る・割る」事象における語彙カテゴリー化の対照研究」『言語研究』158,63-89. / 中本敬子・野澤元・黒田航(2004)「動詞“襲う”の多義性—カード分類と意味素性評定に基づく検討—」『日本認知心理学会第2大会発表論文集』38. / 松本曜(2003)(編著)『認知意味論』大修館書店 60-65. / 森山新(2012)「認知意味論の観点からの「切る」の意味構造分析」『同日語文研究』27, 147-159. / 森山新(2015)「日本語多義動詞「切る」の意味構造研究—心理的手法により内省分析を検証する—」『認知言語学研究』1, 138-155. 【例文出典】KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」国立国語研究所./「NLB コーパス」国立国語研究所.